（別紙２）

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　村田麻里子

本論文『ミュージアムとは何か：メディア論的考察による転回』は、ミュージアムをメディア論の視座から総合的、かつ動的にとらえなおすことで、公共機関の財政危機、グローバル化、商業化がもたらす諸問題など、ミュージアムが現在陥っている袋小路と、歴史･思想的研究と実務的研究が乖離してしまっているミュージアム研究が陥っている閉塞状況を打開するための視野を獲得することを目的として書かれている。

メディア論の三つのアプローチ、すなわち歴史社会学的アプローチ、文化研究的アプローチ、実践研究的アプローチを、それぞれおおまかに近代ミュージアムの歴史（1 章、2 章）、現代ミュージアムの諸現象（3 章、4 章）、それらをふまえた新たなミュージアムの模索のための諸活動（5 章）に対応させて援用している。

■構成と概要

序章と終章を含む 7 章で構成されている。

序章で、ミュージアム、およびミュージアム研究が現在抱えている問題状況を浮き彫りにした後、先行研究の綿密な検討をおこない、メディア論という視座、およびメディア論の三つのアプローチを用いた方法論を提示している。

1 章では、ミュージアムという組織の根幹を支えるパラダイム（蒐集･保存･展示のための権力的空間）を文化研究的アプローチによって明らかにしている。

2 章では、1 章で論じた視覚偏重のミュージアムのパラダイムと思考様式が、日本にどのように輸入され、「ミュージアム」が「博物館」へと変容したかについて歴史社会的アプローチから探っている。なお、2 章のあとにはミュージアム空間における物語の生成に関する歴史社会的な補論が入っている。

3 章では、これまでの 2 章をふまえつつ、1990 年代以降のポストモダンにおけるミュージアム･イメージの拡張現象について、欧米と日本の共通点と相違点を、文化研究的、歴史社会学的アプローチを交錯させて論じている。

4 章では、3 章と横並びのかたちでミュージアムの「ポピュラー文化」化現象を文化研究的アプローチからとらえなおしている。欧米ではおしなべてミュージアムは「ポピュラー文化」と対立的にとらえられる一方、日本では「ポピュラー文化ミュージアム」があちこちで成立している状況を、足立美術館などの実証研究を通して明らかにしている。

5 章では、ミュージアムと病院をはじめとする社会的組織と結びつけ、相互のコミュニケーションを育むための実践的ワークショップ「ホスピタルリーチ･プロジェクト」の概要と評

価分析を通して、ミュージアムを社会に開いていくことでその存在意義をミュージアム関係者が再帰的にとらえなおすと同時に、来館者がミュージアムをめぐるメディア・リテラシーを涵養していく具体的な方法を提示している。

終章では、ここまでの論述をふり返ると同時に、ふたたび日本のミュージアムの現場とミュージアム研究が陥っている問題に立ち返り、本論の知見をもとに問題状況を俯瞰し、それらに対応していくために歴史社会学、文化研究と密接に結びついたかたちでのメディア・リテラシーを基軸とする実践研究の新たなあり方を提示している。

■評価と議論

審査委員のあいだでおおむね合意された本論の評価は次の通りである。

まず、これまでのミュージアム研究は、フーコーの「まなざしの近代」に触発された歴史的、思想的な研究群と、一方できわめて実務的な展示学、経営学、教育学的な研究群のあいだの乖離が著しく、かつ固定化され、それらのいずれかの枠組みの中できわめて専門特化した、あるいはミクロな問題意識を持った研究がなされてきていたのに対し、この論文は総合的、学際的な知識と観点においてずば抜けており、またミュージアム、およびミュージアム研究の全体的な困難を一手に引き受けるような痛烈な問題意識に貫かれていることは、大いに評価できる。

また、そうした問題意識に対応した、具体的で実践的なミュージアム・コミュニケーションのためのワークショップを生みだし、プログラム化している点には高いオリジナリティが認められる。

一方で、ミュージアムを、いわば力業で総合的にとらえようとするあまり、キメの粗い議論が散見されると指摘された。一つには、日本に輸入された「博物館」の制度化をとらえる際に、日本近代史における天皇制の象徴的役割と国民国家の形成とが抜きがたく結びついているという歴史的理解が十分ではない。また、本論でいうメディア論はいわゆるオーディエンス空間論、あるいはコミュニケーション論といいかえた方がよい部分があり、その部分を整理した方が後半のミュージアムの来館者研究やメディア・リテラシー論をより豊かに発展させられたであろう、というものであった。

しかし、全体としてはミュージアムをめぐる歴史社会的状況、文化的諸現象、そしてそれがはらむ諸問題と可能性を十分に理解しており、高い次元の学問的問題意識でこれからのミュージアムのあり方を研究していく意志と実践力を持つものと判断し、本審査委員会は、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと判断する。